

Meaning in Lifeの主観説とは何か（後半）

伊 集 院 利 明

前半部あらすじ

Meaning in lifeに関する近年のいわゆるWolf-Metzパラダイムにのっとった研究において、最も重要な論争となっているのが、主観説と客観説との間の論争である。しかし、近年のこの論争において、主観説をいかなるものとしてとらえるかに関して重大な混乱があり、そのために客観説の選択肢として重要なものが見落とされてきた。本稿前半では、「主観的状态、活動基軸説」と名付けるものを提起し、その正当性の解明に着手した。

後半部要旨

Meaning in lifeに関する近年のいわゆるWolf-Metzパラダイムにのっとった研究における主観説対客観説の論争に参入し、「主観的状态、活動基軸説」を基礎づける。Meaning in lifeにとって一定のあり方の主観的状态、活動が必要であること、それでも純主観説は成り立たないことを示し、また、この論争において、典型例の扱いについて誤解がなされてきたことを明らかにしてから、世界と関わる外的な活動がある場合には、活動から帰結する成果よりも、主観的状态、活動のあり方自体が重要性が高いことを明らかにする。

キーワード：meaning in life, 主観説、客観説、Wolf-Metzパラダイム、「主観的状态、活動基軸説」

6、準純客観主義* vs. hybrid説*の論争をめぐって

Metzは準純客観主義*をとえ hybrid説*を退ける。そして、hybrid説*に対する準純客観主義*の優位を主張した、ないしは、し得る論拠としてここで取り上げる必要があると言えるのは、(前節で扱ったものをのぞけば)そのためにMetz 2013に提示されたものぐらいいしかな。しかし、これに対するSvensson 2015⁽¹⁾の議論は(ある意味では)有効性をもつと思われる。そしてこの事情から、meaning in life (以下MIL)にとって、一定

のあり方の主観的状态、活動が必要であることが、(手短な考察で十分に)明らかになると思える。

Metzの議論は二つの事例を証拠として挙げることによって展開される。第一に、他人が退屈しないために自分が退屈な役割を受け入れる人の人生は有意義であるが、しかし、退屈している段階では退屈しているのであって、主観的認が伴わない。第二に、仮想マザーテレサが仮に有意義感、使命感等からではなく、単に地獄での罰を恐れるというような動機だけから、(現実のマザーテレサと同

じ) 事業を行っていたとしても、その事業の生には明らかに大きなMILがあるように思える。これに対してSvenssonは次のように批判する。Metzは局面を狭くとらえすぎている。退屈の例の場合で言えば、退屈している段階では生を認可していないが、そうなることを承知のうえで彼女はその生を引き受けたのであり、そこにはその生のあり方に対する強い認可が背景としてある。仮想マザーテレサの場合にしても、地獄を恐れるということ自体が、信仰心の表れであり、そうした信仰心による是認という大きな文脈の中に彼女の人生選択がなされていることをMetzは見落としている。

私がSvensson側に(ある意味では)有効性があるとみるのは、論争を準純客観主義*とhybrid説*との論争として見る限りにおいてである。準純客観主義(アスタリスクなし)の弁護としては、Metzの論には説得力があるのかもしれない⁽²⁾。もっとも、準純客観主義*とhybrid説*との論争が何と何の争いなのかを明確化することは、不可能、あるいはそもそも無意味なのかもしれない。それでも、仮にこの争いが、MILにとって一定のあり方の主観的活動、状態が働いていたことが必要であるかどうかの論争であるとするならば⁽³⁾、Metzの提出した事例は、不必要性を示すものにはなっておらず、むしろ(Svenssonの論から明らかなように)必要性を示すものになっている。そして、前節で論じたように、純成果主義を支える議論は成功していない。結局のところ、必要性を示す議論、事例が多くある一方で、不必要性を示すような議論、事例は提示されて(されたことが)ないのである。

第5節および第4節で扱った『素晴らしき哉、人生』のジョージ・ベイリーのケースについても同様である。確かに彼は総合的には(少なくとも意識上においては)自身の仕事を嫌っている。しかし彼が仕事でおこなって

いることは、明らかに彼の価値観とでもいうべきもの、あるいは彼の(根本的な)人柄を反映している。前節で扱ったナチ党員やヒトラーが後から振り返って自分の生を有意義だと思ったとしても、我々はそれをあまり正当とはみなさない。ナチ党員の事例について言うなら、自分の活動がよきものであるという判断が後から起こったとしても、その判断は、行動の時点での彼らの価値観や人柄と何ら関連を持たない。(同様に我々はハゲタカ・シジフォスケースにおいて、シジフォスが生に有意義性を感じることの正当性を肯定すべきではなく、それと、彼が自殺を踏みとどまったことに対する肯定的感情とは、区別して扱うべきである。)しかし、ジョージ・ベイリーが、自分の人生が素晴らしいものがあったのだと見出すことに対しては正当性があると我々は感じるし、また感じるべきである。他の事例と対比して考えるならば、それはその彼の判断が、以前の彼の価値観や人柄と十分な関連性を持っているからに他ならないことは明らかであろう。

なお、以上の論から、何らかの主観的な要因が必要であるというだけでなく、そうした主観的あり方として、単に意図を挙げる⁽⁴⁾だけでは十分と言えないことも、明らかになっていると言えるであろう。それは、上に扱った怠慢なナチ党員と「悪意」あるナチ党員の例から明らかであろう。これらの事例では、ユダヤ人たちを逃がすということ自体が意図されているが、上に見たように、これがMILの成立につながるとは考えにくい。単なる意図ではなく(少なくとも)それをそれ自体よきものとして意図するなどの(この「など」はとりあえず広く考えておきたい)ことが必要である。

7、典型例をどのように扱うべきか

本稿にとって最も重要な主張を第9節で論じるに先立って、第7, 8節では、その地な

らしとなる考察を二つ加える。本節の第一の考察は、MILの実現の典型例として扱われている人生（マンデラ、キング牧師、アインシュタイン、ピカソ等々）の扱いについてである。というのは、本論文はあくまでもWolf-Metzパラダイムの中で動くことを前提としているが、この典型例の存在を考えると、このパラダイムの中で、成果よりも主観的状态、活動が重要であるという主張を展開していくことが、かなり困難な企てのように映るかもしれないからである。いま挙げたような典型例を典型例として扱い、そしてそれらこそがMILを大きく実現させたものとして扱うのならば、当然のことながら、それらの人生において大きな成果が得られていることに着目せざるを得ないように見える。ならば、これらの典型例を典型例として認めることは、それ自体で、MILにとって成果（こそ）が極めて重要であることを認めることにつながらざるを得ないのではなかろうか。他方でしかし、もしこうした典型例を典型例として認めることを拒否するのならば、それはWolf-Metzパラダイムから逸脱することを意味するのではなかろうか。少なくともMetzならば（あるいは、Wolfもまた）そう主張するであろう。実際にMetzは、これらこそがMILの研究においてMIL実現の典型例として扱われ続けてきたものなのであり、それを否定するならば、そもそも何について論じているのかについて、これまでの研究から逸脱した立脚点に立つことになるのだということを繰り返し強調している（Metz 2013, 2015a,b, 2016）。

私は（少なくとも本稿の中では）Metzが典型例として扱っているものをほぼそのまま典型例として扱うことに同意することを、ここで表明する。（そして、そのような形で、本論の研究をあくまでもWolf-Metzパラダイム内のものとして展開する。）本節では、典型例をほぼそのまま認めることと、成果をさほどは重視しない説を打ち立てることとが、

決して矛盾しないことを、二つの面から論じる。第一の点は、いましがた「ほぼ」と述べたことにかかわり、一般的に、典型例を含む初発的な直観が、哲学研究においていかに扱われるべきであるかにかかわる。第二の点は、ある分野での典型例が、必ずしもその分野で最も価値の高いものであるとは限らないということにかかわる。

第一の点から。反照的均衡の方法を例にとってみればわかるように、その初発時の直観的合意が研究の成立にとって重要であるとしても、それはその全体が金科玉条のごとく遵守され続けるべきだというようなものではない。当然、直観は、様々な原理的思考、他の様々な直観等とのすり合わせなどにより、訂正されて行かねばならない。

例えば、倫理的考察をはじめ（人類が開始する）にあたって、典型的に道徳的悪である行為の事例として、「無実の人を殺すこと」に着目するとしよう。考察過程において、この直観を完全に無視するような論を展開するならば、それは、そもそも何について扱っているのかという点で、探究の基軸から逸脱するものとなるであろう。しかし、この直観を常に完全に正しいものとして扱い続けねば、道徳についての探求がそもそも成り立たなくなるなどと考えねばならないいわれはない。当然、当初の直観は、例えば「自発的積極的安楽死は悪ではない」などの形で訂正されて行ってしかるべきである。——MILの典型例についての私自身の見通しを述べるならば、私はキング牧師、マンデラ、マザーテレサを典型例として扱うことには賛成するが、アインシュタインを彼らと同程度の典型例として扱うことに対しては反対する（第9節で論じる内容はある程度はその理由と関連している）。また、すぐ後で述べるように、典型例であるということは、MILの最大の実現量があるということを特に意味すると考える必要はないと考える。もちろんここで、この見

込みの(典型と実現量との関係の問題以外の部分の)正しさを主張しようなどとしているわけではない。論のこの段階で重要なことは、上の安楽死についての訂正例と比べてみるのならば、いま私が示したような程度の改訂ならば、十分、当初の直観の研究維持上の必要性を認めたくえでの改訂の範囲内のものであり、パラダイム変換の試みと言えるものにすらならないはずであるということである。

上の類比において、倫理学探求の当初の直観とでもいうべきものを取り上げた。いまの類比がいま取り上げたような形でほぼそのまま成り立つということをはっきりと主張したい。

典型例に関して、上述のようにMetzはこれらの典型例にもとづいて考えることこそがMIL研究として行われてきたことであると、しばしば主張する。しかし、そもそもこの分野の今の研究プログラムの発端は、Wolfでしかない。MIL研究が、研究パラダイムが明確に確立されてまとまった体系性を持った研究となり、MILが学界単位での体系的な研究対象となったのは、ごく最近のことである。だからこそ、MILの典型例についての直観は、上の殺人についての初発的直観と似たようなものとしてとらえられるべきであると主張したい。meaning of life (以下MOL) とMIL (meaning in life) をはっきりと区別して、研究をMOLとは区別されるMILについてのもんとして展開する方針を明快に打ち出した人こそがWolfである。それ以前において、両者が明確に分けられて扱われていたとはとても言えない。(有名なMetz 2002の論文タイトルは“Recent Work on Meaning of Life”である)。そして、Wolf (1997, 2010) が上に挙げたような典型例を用いたことは確かだが、そこでのWolf自身の扱い自体がまさに初発的直観としての扱いである。典型例をはじめとした諸直観がパラダイム成立の基幹として尊重されるべきであっても、その扱いは、少なく

とも現段階においてはかなり柔軟なものではないはずである。

もう一つの重要な問題は、何かをある価値分野の典型例として認めるといことが、必ずしもそれをその分野で最も価値のある代表例として認めることを意味しないであろうということである。

Wolfが典型例に着目した時、彼女はそれととりあえずの典型例として扱われるべきであることを主張しているが、それ以上にそれこそが最もMILの高い実現の例であることを特に強く主張しているとは言えない。Metzは、この点ですり替え(おそらくは無意識的な)を行ってしまっているように見える。

絵画作品として典型的な絵画であると言えるものが、絵画として最も優れているわけではないかもしれない。「モナリザ」と「ゲルニカ」とでは、「モナリザ」の方が典型的な絵画と言えるであろうが、だからと言って、それだけですぐに「モナリザ」の方が絵画として優れていることにはならない。典型例というものは、その分野に属する諸トークンの特徴分布配置図の中心的位置にあるものであったり、それがその分野の価値の実現であることの明瞭さのゆえに、典型例となり得るであろう。そのように考えれば、典型例が必ずしも最も高い価値の実現とは限らないことは当然のことであろう。「ゲルニカ」は、人口のうちの何割かの人にとっては、「モナリザ」ほどは、絵画としての価値がわかりやすいと言えるものではないであろう。とすれば、マンデラ、キング牧師がMILの典型例としてふさわしいのは、その価値の高さよりは価値の実現のわかりやすさゆえである可能性が考えられる。

このことは、本論文の狙いにとっても重要な意味をもつ。例えば、次のように考えられるかもしれないからである。「MILにとって重要なのは、成果以上に、活動の主観的あり方の持つ客観的な価値的あり方である。しか

し、主観的な状態のよさは、必ずしも成果に結びつかないにせよ、それとある程度のゆるい相関関係を持つ。そして、主観的なある種の状態、価値実現は、成果などの外的表れがなければ他人から見てわかりにくい。そして、成果が上がった場合には、その成果のあり方からその人の主観的状态、活動がある程度推察しやすくなる場合がある。それゆえ、明確な成果が上がっていて、主観的状态のあり方がそこから類推されそうなケースが、MILの典型例として扱われることになる。——これは実は（本稿より後に）私が打ち立てようとしている主張である。いうまでもなく、この段階でその正しさを主張しようとするわけではない。ここで肝心なのは、このような可能性、および、おそらくは他の様々な可能性⁽⁵⁾がある以上、典型例をその価値の最上の実現として扱うことに対しては、かなり慎重にならなければならないということである。

以上に対して、例えば、「ゲルニカ」の絵画的価値がわからない段階では人は「ゲルニカ」よりも「モナリザ」を典型として扱うが、価値がわかり二つが同等な価値だと思ふ時点では、二つを同等に典型例とみなすことになるのではないかと、反論されるかもしれない。しかし、まず、今の話が本当に「ゲルニカ」と「モナリザ」の例に当てはまるのか自体が、かなり怪しいように思える。さらに言えば、典型的な彫刻の三流作品とデュシャンの「泉」とで、「泉」の価値が分かった段階でそのような気になると主張するのは、かなり無理がありそうである。また、同様に、キース・リチャーズとDNAのアート・リンゼイでは、明らかにキース・リチャーズの方が典型的なロックギタリストであろう。どちらの方がロック的価値を体現しているかと問われるならば、少なくとも私自身には同等であるように見える。それでも、仮に同等と認めたととしても、ギターコードをほとんど知ら

なかったと言われている、極めて型破りなギタリストであるアート・リンゼイは、明らかにロックギタリストの典型として扱いきる人物ではない。ある分野での典型として扱われているということだけではなく、そのように扱われるべきであるということですら、その分野の価値の最も高い体現であることに直結するわけではないのだ。

以上、二つの点の考察から、マンデラ、キング牧師等をMILの実現の典型例として扱うことが、彼らこそをその価値の最も高い実現として扱うことをじかには意味しないこと、それゆえ、成果以上に他の要因を重視することと何ら矛盾しないことは、明らかであろう。

8、純主観説を擁護する議論は成功していない

表題にあるように、本節で扱うのはアスタリスクなしの主観説である。第3節で示した理由により、Metz以降の論で主観説を謳った論のほとんどが（主観説であるかという点で）脱落する。そのため、Metz以降にこれまでに現れた論で（私が知る限りでは）パラダイム内のもので主観説の候補として考えられるのはほぼSvensson 2015に絞られる（森岡 2015はパラダイム内のものとして扱うには無理があると判断する）。

主観説の最大の障害になると衆目（この分野の論者たち）が一致するのは、直観的にあからさまに無意味に見えるような、芝生数え、安っぽいメロドラマを見続けること等々の生が、本人さえ満足するならば有意味なものとしてされることになるという、きわめて反直観的な帰結を招くという問題（「芝生問題」と名付けておこう）であるが、Svenssonはこれに対して真正面から取り組む。Svenssonは、自説で主観的是認として要請されるところの是認が、積極的に関与する、自己同一化する、深く心にかける、といったものに限定されるとする。芝生数え等の例に挙げられる活

動は、いま述べた主観的活動の能力が備わるような形でノーマルに発達した大人が生をかけるような種類のものではないというのが、Svenssonの主張である。しかし、そんな大人が実際にいたとしたら、それでも意味があることになるということこそが問題であるはずではないかという問いが、おこることが当然予想されるが、これに対してSvenssonは、次のように応じる。そんな大人は想像しにくい。しかし、もしそのような大人が想像できるとするならば（つまり、ノーマルに上のような（人間的）能力を獲得する形で発達したうえで、そうした活動に熱心になっている大人の姿を想像し得るとするならば）、その場合には、私（Svensson）自身は、そのような人間の活動がMILにつながらないという直観をまったくもてない。

この主張は説得力を持つであろうか。大方の「英語圏」の学者はこの直観を共有しないのではなかろうか。しかし、なんとなく共有できそうだという気がするような人も現れるかもしれない。事情をより明確にし、かつSvenssonの論が主観説擁護としては成立しないことを示すために、やや迂回路と見えるかもしれないような形の説明を展開させていただく。

私（伊集院）自身の直観の正直なところを言うならば、私は芝生数えの生が有意味なものであり得るかもしれないという点に限っては、Svenssonと直観を共有していると言ってよい（その正当性を本稿中で論じるつもりはない）。しかし、これは、私がSvenssonの論が主観説の擁護として成功していると思っているということではない。本論文中では議論を展開するつもりが全くない点にまで踏み込んで、（話を分かりやすくするために）まず手札を机にさらしてしまうとすると、私は例えば次のようなことを考えている⁽⁶⁾。例えば、賽の河原のようなところで石積みさせられ、常に完成間近で鬼に壊されてしまい、

それを続けなければならないというシジフォスの状況を想定してみる。そして、ある時この人物ができるだけ面白い芸術的な形に石を積み上げることを思いついて、それに熱中する。作品は残らないが、パフォーマンスアートなど残らない作品はいくらでもある以上、そのこと自体がこの活動を無価値にするわけではない。観客が一人（本人）だけであることは意味をかなり減じるかもしれないが、少なくともゼロにするわけではないだろうと判断する。そして、出来上がる作品の価値がそれほどではないとしても、一定程度の価値はあるだろう。私は、そのような生にもそれなりの一定程度のMILがあると（本稿よりも後の段階の研究において）主張していく予定であるが、これは、作品に（それほどは価値が高くない作品であってもそれなりの価値に応じた）、あるいはそのような作品を創る活動自体に、価値があるということをMILの判断根拠ととするものである以上、主観説というにはほど遠い。さらに、私は次のように考えたいと思っている。この創作活動が実際のものの制作につながらず、想像等の形で心の中だけで行われるとしても、それには一定の価値があるだろう、と。ただし、この場合も主観的状态が問題となるものの、主観的状态のあり方、価値が問題である以上、決して主観説にはならない。むしろ問題なのは客観的あり方である。——もちろん論のこの段階で問題なのは、こうした活動に価値を認めることが正当かどうかではなく、このような考え方がかりに説得力を持つとしてもそれは決して主観説ではないということである。

私が芝生数えの生にも意味があり得るかもしれないとする点（に限って）でSvenssonに賛成したくなるのは、そのような生の精神のあり方にも何らかの深みなどがあり得るかもしれない（例えば、私ならば、つらい目によって引きこもった人間が、必死で生のよろこびを見出すべく模索している姿を想像したくな

る)と考えるからである。(実は私は、自身のwell-being(以下WB)の模索ですらMILにつながり得るといふ説を立てようと計画している。この説は、MILが何等か「自己を超えるもの」とのかかわりをもたねばならないのではないかという問題、難点を克服せねばならないが、一方で、自分のWBのことだけで精一杯の知的障害者の生にMILがないと主張することは、私にはひどく反直観的に映る。ちなみに、主観説では本人が是認していなければMILが認められないことになるが、私が構築を目指している説では、例えば、上の引きこもりのケース等において、本人が有意義感を感じていないとしても、場合によってはMILがあり得ることになる。)いうまでもなく、これは主観説を支持することにはならない。そして、もちろん、いま述べたこと自体をここで論じるつもりはない。ここで私が問題にしたいのは、このような形で、あるいはこれに何等か近い形で、我々が主観説の主張をすり替えて理解することによってはじめて、Svenssonの芝生問題に対する応答が、説得力があるような外観を呈するのではないかということである。(迂回路からようやく話が戻ったことになる。)

これは、決して勝手な邪推などであるとは思えない。Svenssonの応答の第一の段階からしてすでに、このことはかなり明らかであるように思えるからである。Svenssonは、芝生の数数え等はノーマルに育った大人が積極的に取り組むようなものとしては想像しにくいとするが、こうした判断の内には、すでに健全さなどについての一定の価値判断が前提されていると主張したい。積極的関与などの概念自体の中に、芝生数え等とのかかわりを妨げるようなものは何ら含まれていない以上、関与に関しての人間としての健全さについての判断が一定の(本人の同意云々を度外視した)価値判断としてあるのであれば、上のような議論は成立しないはずである。自

己同一化などが伴う主観的、心理的活動があるにせよ、それと積極的関与、同一化との関連のまっとうさ、健全さ等についての判断がなければ、芝生数え等との関係の不自然さ等を主張するための材料を見出しようがない。Svenssonの論は、大人としての成長の健全さについての価値判断を前提としている。だからこそ、まっとうな大人が自己同一化しているのなら芝生数え等でもMILがあると主張することに一定の直観的妥当性が生まれる。しかし、こうしたカラクリがなければ、あからさまに無価値としか言えないように思える活動にどうして価値があると言えるのかが説明がつかず、主張は説得力のないもの、ないしは直観的不自然さ(と多くの人の目に映るもの)を無視して主観主義の正当性をやみくもに言い張るものに、ならざるを得ない。——まっとうな大人がすることならMILがないとは言えないという直観に正当性があるとしても、それが正当性を獲得するその段階においては、それに基づく主張は主観説の主張とは言えない。すでに、心的活動についての(本人の是認から独立した)価値判断がそこでは前提されている、もっと言えば、密輸入されているのだ。

先にも書いたように、私自身は、芝生数えのような活動の生にもMILがあり得るかもしれないとする説を構築しようとしている。しかし、そのような判断をしたら、そのさい、我々はすでにその心的活動などに何らかの価値を認めているのだ。MILが純主観説で説明できると考えるのには無理があるということ、動かしがたい。

9、成果よりも主観的状態、活動の方が重視されるべきである

第4節で予告したように、ここで論じることは、世界とかかわるような何らかの(外的)活動がある場合には、主観的状態、活動のあり方の方が、実際に実現された成果よりも、

相対的に言ってMILにとって重要性をもつということに限定される。

この主張を裏付けるための最も強力な論拠、議論は単純なものである。それは、成果というものが、本人のあずかり得ない様々な外的な偶然によって大きく左右されるということである。そのようなものによって人生の価値、特にMILのような価値が大きく変動すると考えることは、(これから論じていくことを考えると)かなり不合理なことに思える⁽⁷⁾。

革命家が二人(A、B)いるとしよう。議論の都合上、この革命がきわめて有益なものであると仮定しよう。両方ともが同じような熱意、真剣さ、その意義についての深い理解、そしてさらには同じような能力によって仕事を遂行する。しかし、最後の戦いのときに一瞬突風が吹き、それによって、放たれた矢の方向が変わり、二人の運命は正反対となる。Aは大きな成果を収め、Bは惨めな結末を迎える。さらに、次のようなケースを考えてみよう。同じような能力を持った二人の科学者C、Dが、似たような時代状況の中において別々の研究を行う。二人ともそれぞれの壮大な仮説を裏付けるための重要な実験を行うが、その成果が両方とも死後10年たってからしか出ない。別の研究をすることもできたのだが、CもDもそれぞれの研究がもたらし得る成果が科学の発展にとって極めて根本的であるため、それにかけることにする。しかし、この実験成果がうまく現れるかは、死後10年の間のきわめて外的偶然的な要因に大きく左右される性格のものであり、成果が出るかどうかは五分五分である。C、Dは、それを承知のうえで、自分たちの研究の重要性、根本性を思い実験を整え、最善を尽くす。そして、それぞれそれなりに自分の果たしたことに満足覚えながら死の床につく。そして、10年の間の運が大きく左右し、Cの実験は大きな成果を残し科学的理論を大きく変換させるが、Dの実験は不運に見舞われほとんど何の成果

も残さずに終わる。

A、Bについてはある程度直観が分かれるであろう。しかし、C、Dについては、MILが成果に比例するほどに、あるいはそれに近い程度に大きく変わると考えることは、かなりばかげた話に映るであろう。この二人がそれぞれ果たしたことに満足を覚えながら死の床に就くということには、正当性があるように思えるであろう。(もっと言えば、同じような満足を覚えることに正当性があるように思えるであろう。)そしてこの満足(の正当性)は、活動がかなりの自己犠牲を払うものであったと想定するならば、WB (well-being) 価値以上にMIL価値を反映したものであると考えざるを得ない。

そして、これは、さらに別の強力な裏付けによって支えられると考えられる。MIL研究のWolf-Metzパラダイムの基軸となるものとして前提されているとあってよいものに、次のものがある。それはMILが、それぞれの人間にとって重要な価値である、それぞれの人間が重要なものとして追及してしかるべきものであるという、前提である。(そしてこれは、実態的に、MILを必ずしもすべての人が重視しているわけではない(cf. Schnell 2010)にせよ、それなりに多くの人にMILが重要なものとして扱われており、また、個人のMIL観(MILについての満足、自己理解等)が、個人の幸福感やその他の価値感、さらには健康等とも、それなりに強い相関関係を持っているという事実⁽⁸⁾による裏付けも持っている。)しかるに、もし本人の手ではどうにもならないようなものによって(上のA、Bや、C、Dの事例のように)MILがきわめて大きく変わるのだとするのなら、各人がそれを重視して真剣に追求することに何の意味があると言えるのであろうか。

これに対しては、その論は本人がどういうことに意味を感じるかという問題と、何に意味を感じるのが相応しいか(正当性がある

か)の問題とを混同しているのではないか、人間は成果を重視していないかもしれないとも、すべきなのではないかという反論が出るのが予想されるかもしれない。しかし、この場合に、この反論がそれほど説得力を持つとは思えない。例えば、WBの客観的リスト説を考えてみよう。これは、本人が現に欲求しているか否かにかかわらず、リスト内の項目（例えば、快、達成、友愛、知）が当人の幸福を構成するとする（言い張る）説である。この客観的リスト説の欠点として指摘されているのがalienation問題（Railton 1986）つまり、本人が魅力を感じていないものをその本人にとって善であるとするのは、本人をその価値から疎外するものになるという問題である。しかし、この問題の存在にもかかわらず、客観的リスト説に一定の訴求力があるのは、（主観説側に難点があることの一方便）リストに入る項目にそれなりのもっともらしさ、それらが善いものであることについての、かなり多くの人間の直観の支持が得られそうな見込みがあるからであると言える。つまり、もっと言えば、どのようなものが人間にとって善きものかということに対して、多くの人が答えるであろうようなものが、リスト項目に入れられるものに他ならないということである（Woodard 2016, Fletcher 2016）。客観的リスト説について、リスト項目の選択が恣意的になるのではないかという疑念が指摘されているにもかかわらず、この恣意性問題は、今日ではほとんど、項目の間の統一項の必要性の如何等についての理論上の問題となる。つまり、なぜ項目のそれぞれが論者によって選択されるのかについては、少なくとも代表的な（多くの論者が一致する）項目に関しては、それなりの直観的訴求力があるものとして扱われる。客観的リスト説論者たちが、リストを実質的にはかなりの程度、多くの人間の直観からくみ上げて考察している以上、これは当たり前のこととも

言える。そうである以上、そしていまあげた直観が、多くの人の見方、しかも、自身の幸福についての各自の見方を、反映するものである以上、（少なくとも多くの論者が一致するような代表的項目に関しては）各項目はたいいていの人に対しては、その善さを、その人が健全な状態に置かれているならば、説得させられそうな見込みがそれなりにあると見られる。こうした事情がなければ、客観的リスト説は魅力の薄いものになってしまうであろう。しかし、これに対して、MILに関して、偶然的運に大きく左右されるものに重要性があるということ、多くの人に、とりわけ、自分はきわめて運のない人間だと思っているような人に、どう納得させろというのだろうか。——確かにWBのきわめて重要な構成項目であると（客観的リスト論者によっても多くの市井の人たちによっても）目されている快楽は、かなりの程度、運に左右される⁽⁹⁾。しかし、快の善さというものは、それがあるときに直接的に実感できる。そのような直接的な形で訴えかけるようなものがMILの成果的要因にあるわけではない。しかも、快は運に依存するところがかなりあるとは言え、そして不快の連続の生というようなものがある可能性がそれなりにはあるとはいえ、人間に適応のメカニズム（これにも限界がある（Diener et al. 2006）にせよ）があるために、成功成果に比べれば、それほど極端に人間間で不平等に配分されているとは言えないはずである。

この論点は、単に運の差だけではなく、才能の差についても当てはまると考えられる。才能に恵まれない大多数の人間が、MILにはきわめて低い程度にしかあずかれないとした場合に、それを重視することに彼にとって何の意味があるのだろうか⁽¹⁰⁾。重視してしかるべきであることを納得させるような道筋が何かつけられなければ、説は説として信憑性のないものになる。運や才能によって大き

く左右される成果がMILにとって極めて大きな役割を果たすということは、このように考えると、それ自体かなり不自然な説であると考えられる。多くの人が現に何を重視しているかの事実との食い違いだけならば、何ら致命傷にはならない。しかし、こうした生にかかわる価値の問題について、多くの人(何らかの理想的認知的状態に置いたとして)に対して、納得させられるめどがつかないとすれば、それは重大な問題である。学問の世界で成果が重要なものとして扱われてきたということは、MILのここでの問題に関してはあまり良い論拠となるものではない。その重要な礎であった典型例の扱いが、決してその強い支持基盤と考えられるべきでないことは、第7節で論じたとおりである。そうした直観は、様々な他の考察とすりあわせて均衡が模索されるべきである。これまでの考察からすれば、均衡点は、成果重視の地点にはとても見出せない。そして、主観説が成り立たないこと、主観的な(「効力」のある)是認がMILにとって必要ではないということが言えたとしても(私は言えると思うが)、それはそれ自体では何ら成果が重視されるべきことの論拠となるものではないことも、論じてきたとおりである。主観説、客観説の区分についての混乱が明確化されるならば、成果を重視する立場が、それほど裏付けを持たないままに、支持されてきた実態が明らかと言えるであろう。

さて、本論は、成果以上に主観的状态、活動(の客観的価値)に着目することを重視すべきであることを主張するものだが、ここまでの論から、主観的状态、活動について重視すべきなのが、才能の行使などではなく、むしろ自己同一化などの状態、活動の真摯さ、健全さ、深さ等であることは、かなり明らかになりつつあると思われるが、このことについて論をさらに展開しよう。

アインシュタインの生を次のような生と対比してみたい。言わば、スーパーアインシュ

タインの生である。——双子のツヴァイシュタイン(ネ)とドライシュタインの兄弟が、地球にきわめてよく似た星にいる。ツヴァイシュタインは超天才であり、地球上でアインシュタインが打ち立てたのと同じ業績を10歳で成し遂げてしまうが、その後はきわめて無為な生を送る。同じく超天才のドライシュタインも、ツヴァイシュタインとほぼ同様の生を送る。しかし、一つだけ重要な違いがあり、それは、ドライシュタインが関心を持ったのが物理学ではなく将棋であったということである。ツヴァイシュタインとドライシュタインは、5歳の時のある日、同時に(別々の)トイレに入り、そこで長い時間を過ごす、その時たまたまトイレにおいてあった本が彼らの道を分ける結果になった。そして、二人とも10歳までに大業績を上げ、10歳のころに他の遊びのほうがおもしろくなってしまい、また、極度に自堕落となり、80代で死ぬまで無為な人生を過ごし続ける。

人生をかけてもMILにまったくつながらないようなことの代表例として、芝生数えと並んでよく用いられる、Wolf(eg. 2010)のお好みの例に、sudokuというゲームがある。この例はかなり直観的に訴える力を持っているように見えるものの、sudokuと将棋を比べると、我々の直観はかなり揺らぐかもしれない。将棋は、sudoku(数独のこと)と同様にあまり意味のないものに見えるかもしれないが、他方で、例えば羽生善治の生にあまりMILがないというのも、少々反直観的に見える。しかし、ここで重要なのは、単にアインシュタインとツヴァイシュタインを比べるのではなく、アインシュタイン、ツヴァイシュタイン、ドライシュタインを並べた場合に、事情の見え方がかなり異なってくるであろうということである。アインシュタインとツヴァイシュタインを並べるだけなら、ツヴァイシュタインの人生のMILがアインシュタインのものと同等というにはかなり遠いという直観は、そ

れほど強くない人が多いかもしれない(私自身は例外だが)。しかし、ツヴァイシュタインとドライシュタインを比べると、見え方が変わってくるであろう。それは、我々が、いくら天才と言えども子供は子供であるという見方をとるからである。二人にとっては、科学も将棋も同じように面白いゲームのようなものであろう。ドライシュタインがいくら天才でも、将棋に人生を感じるようなことはないし、それに深い感情的感応とのかかわりなどを持つことはないであろう。羽生は16歳ぐらいの時代からすでに棋界最強とささやかれていたが、少なくとも20歳ぐらいの羽生が将棋に感じていたようなものを、10歳のドライシュタインが感じているとはだれも思わない。もちろん、天才なのだから他人にはその心のありようなどわからないではないかと思う人も、いるであろう。ならば、次のように設定しよう。将棋をするときのドライシュタインの頭脳構造は、ディープラーニング型コンピュータに極めて似た(人間としてはきわめて特殊な)構造のものであった。(ディープラーニングコンピューターは的確な判断を下すが、あくまでデータ分析からそれをはじめ出すのであって、なぜそれが的確かの理由から考えるわけではない。)そして、物理学をやるさいのツヴァイシュタインの頭脳構造も、ほとんど似たようなものであるとしよう。この場合、ツヴァイシュタインとドライシュタインにとっては、科学と将棋はどちらも子ども向けの楽しいゲーム(に毛が生えたようなもの)にすぎないであろう。ドライシュタインと将棋とのかかわりには、成人の羽生の場合のそれにおいて、たいていの観客が想定しているような、深みのようなものはない。ツヴァイシュタインがアインシュタインと同じ業績を上げても、ツヴァイシュタインはその業績の価値、意味、とりわけ人類にとっての価値(その道具的価値の面をここでは無視するとして)をアインシュタインのような形(と

多くの人が見なしているような形)で分かっている、あるいは実感しているわけではない。ツヴァイシュタイン、ドライシュタインにおいて、成果の、それぞれにとっての意味合いは、アインシュタインや羽生の場合とは異なる。その重要性が、その人のものとしてあるとは十分に言えないからである。このようにみる限りでは、ツヴァイシュタインの生にアインシュタインの生と同じ程度のMILがあるとは見えないはずである。(ホムンクルスマンデラの事例とも比較していただきたい。)同じ程度と言いつけることは、成果主義の(典型例の不適切な扱いや、主観主義に関する混乱に基づく)頭ごなしの強引な言いなりにしかならないであろう。事業と人とのかかわり方の主観的活動性のあり方の如何は、MILにとってきわめて重要な役割を演じていると考えられる。そして、MILの主観的状态、活動のあり方として問題なのは、才能等の行使ではなく、むしろその際の、事業、(外的)活動への自己同一化のあり方、真摯さ、深さ等である。

さらに、すでに扱った『素晴らしき哉、人生』の例をもう一度取り上げ直してみよう。Smuts 2018やBramble 2015が純成果主義の論拠として利用しているものの、先に述べたように、少なくともこの映画自体は(どう考えても)そのような内容のものではなく、むしろその正反対と言ったほうがよい内容である。主人公のジョージ・ベイリーは(自分の仕事を心底憎んでいるにもかかわらず)、貧しい人をほおっておけずに最善を尽くすような人である。彼においては、活動の価値は意識的次元ではなく、むしろほとんど身体的次元とでも言ってよいところにおいて、彼自身のものとなっている⁽¹¹⁾。そして、だからこそ友人(たいてい裕福ではない人)に囲まれて多くの人に信頼され、それをよろこび(そのよろこび自体と、その価値に対して、そして、彼の仕事において発揮される徳がそれを

齎していることに対して、かなり無自覚であるがままに) 生きている。だからこそ、彼が、自分がない世界がどうなっているかを見ることで、自身の生を有意義なものとして見出すことが、説得力を持つのである。もちろん、こうした映画や文学作品の内容をすぐに論拠やデータとして扱うことや、それらを権威あるものとして扱うことは、今日の哲学研究において許されることではない。しかし、肝心なことは、このような人物であるならば、自身の生にMILを見出すことは当然のことであり、そこには正当性があるであろうということ、そして、その正当性をだれもが納得するはずであろうということである。ジョージがこうした価値をいわば無意識的に表現している人間でなければ、成果があっても映画は説得力を持ち得なかった。そしてそのことには正当性がある。そして、ジョージがこうした人物であるならば、かりに彼が不連続きで失敗続きでも、工夫すれば映画のストーリーは描けるであろうし、それは、MILの価値のあり方に基づく正当性を持つことになる。もちろん、第5節でとりあげた怠慢なナチ党員や「悪意」のあるナチ党員のようなものでは、同じような狙いの映画は作れない。当人が後からMILを感じたとしても、それには正当性が見いだせない。もちろん、それは、ナチ党員の当時の主観的状态、あり方と、成果の善さ(に対する後からの評価)との間に、十分な(客観的)連関がないからである。

10 課題、総括

第4節で述べたように、本稿の狙いは限定的なものである。課題として残されたもので、本稿の論旨へのかかわりの点で直近と言えるものは、次の三つであろう。1、提起された「主観的状态、活動基軸説」は、いかなる意味、形において、主観的状态、活動が「基軸」的であると言わんとしているのか。2、本稿の説でも成果重視主義でもない説で、客観的要

因を取り入れる、ないしは重視する説(hybrid説、準純客観説、純客観説の範囲に入るもので)があるはずである。明らかに、そのうちで最も有力に思えるのは、世界とかかわる(外的)活動の客観的あり方に着目する説であろう。その説に対して本稿の説が優位にあると言えるのか。3、外的活動を伴わない場合にも、成果よりも主観的状态、活動の方が重要であると言えるのか。

いずれの点についても簡単に見通しを述べることだけでかなりのスペースを要する。紙幅の都合上、ここでは2に限定して見通しを提示する。2への見通しこそが、今後の研究のまず初めの足場となり、それが1、3への展望を開くことにつながるであろうと考えるからである。(なお、2'として、成果自体ではなく、運さえよければ成果を出すような活動であるかをどうかを問題にする説も、対抗馬になると思われるかもしれない。これに対しては、とりあえずの暫定的応答として、第9節で論じた才能に関するalienation問題と、ツヴァイシュタインの事例から、反対根拠が考えられるだろうという見込みを述べておく。)

前にも少し書いたように、Wolfの説⁽¹²⁾は、2で問題になっているような説そのもの(うちのhybridバージョン)と言える。Wolf自身に成果を重視する傾向がないわけではないものの、彼女の説は額面上、客観的要因としては、世界とかかわる活動(「外的活動」と呼ぶことにする)のそれとしてのworthwhileさに着目するものであると言うことが可能に思える。これに対して、主観的状态、活動への着目がいかに優位を持つのかについての見通しは、つぎのとおりである。

まず、外的活動のあり方は、それが当人が起こすものである限りにおいて、かなりの程度、主観的状态、活動のあり方により規定される。もし、前者の内では後者によっては決まらない部分のうちのかなりのものが偶然的要

因によるものであるということが言えるとするのならば、前節で論じたのと同じ理由により、外的活動性に対して主観的状态、活動を重視することは、優位を主張できるであろう。

より重要な問題は、外的活動をいかなる観点で評価すればよいのかの問題である。外的活動の価値判断をする際に、主観的状态、活動についてのそれを参照項目から外すとする。その場合に、成果を重んじずに、いかに判断するのであるか。恣意性、混乱を避けることができるのであろうか。(もちろん、外的活動説は、様々な要因を総合的に勘案するという立場をとることができるが、その場合にも同様の疑念が残る。)そして、Wolfは実際に混乱しているように見える。先のsudokuの例(将棋と対比されたい)もそうであるが、それだけではない。Wolf(2010,1997)によれば、マラソンを走ることは有意義であるが、金魚を飼うことはあまり意義がない。また、山に登ることは意義があるが、コンピュータゲームをすることはあまり意義がない。こうした恣意的判断に映るものは、様々な形で批判を受けている(e.g. Cahn, Vitrano 2014, Cahn 2008)。例えば、人類の幸福への貢献度で判別するならば、明確な判定ができたであろう。成果重視の立場をとらずに判定基準を確立することができるのであろうか。

この点に関して、本稿の論旨にかかわる最も重要な点は、次の点である。それは、同じ一つの活動名で括られるものでも、その活動の内実が、本人の関わり方によってさまざまであり、そしてそれが(少なくともきわめて大きな部分において)主観的状态、活動のあり方によって決まってくるということである。

このことは、人間とMILとのかかわりを考えるうえで極めて重要な意味をもつように思える。Wrzensniewskiは、仕事の意義感の研究において有名な人物であるが、彼女の研究は、例えば清掃員という、一見すると意義感

を与えることが少なそうに見える仕事においても、働く人のものとのとらえ方、見方、そして、自分で自分の仕事の内容(範囲)を定め、広げ、限定する模索のありようによっては、さらには、労働者相互の連携のありようによっては、多くの意義が与えられ得ること、そして仕事の内実そのものが大きく変わって得ることを示している(Wrzensniewski et. al. 2001, 2003)。これは、主観的状态、活動のありようによって、様々な形で生のあり方が模索され得ること、それが意義感へとつながっていき得ることを示唆しているように思われる。

これは、とりあえずは、Wolfの論に対する本稿の路線の優位さを示すものと言えよう。Wolfのような形で外的活動をとらえるよりも、主観的状态、活動を軸にそのあり方を理解するほうが、その評定として適切なものが得られそうである。しかし、それだけではない。上に仕事の事例を参照として述べたようなことは、人間の生全体、MILにとって、価値を模索すること、価値を自分のものとしていく(cf. Rosati 2006)こと、価値の新たな姿を開拓していくこと、といったことが、極めて重要な位置づけを持っていることを示唆しているように見える。そして、このことから、ここで扱いきれなかった他の二つの課題についても解決の突破口を開いていくことができるのではないであろうかというのが、私の今後の研究見通しである。

注

- 1 草稿だがすでに引用等されている。
- 2 例えば、退屈の事例についてであるならばMetz側から次のような反論がなされるはずであるように思われる。退屈の時点、つまり生活の大部分を占める時間帯においては、彼女は退屈にとらわれていて、退屈を否認する気分に対する二階の否認が起こらなくなってしまっている。だから生の時間全体としてはともかく、少なくともその時点においては、彼女は生に対する主観的否認があるとは言えない。

- 3 Metzはこのことを認めないだろう。しかし、Metzに混乱がないということにはならない。
- 4 e.g. Purves, Delon 2018 (なお、Kauppinen 2015はこの説を示唆しているように見えるが、Kauppinen 2013では別の説である)。
- 5 例として「自分の人生は、これをするしかないものだ」ということの説得力説、与えられた才能条件の中でどこまでやるかで決まる説(実はどちらも私自身の説ともいえる)。
- 6 拙論「善のリストを検討する(その六)」(愛知大学『文学論叢』158, 2021所収予定)に書いたことと重複する。
- 7 Williams 1993などがアリストテレスを参照に運による価値の変動を考察しているが、アリストテレスにおいてもエウダイモニアは運によって大きく変動するようなものではない(e.g. EN 1100b-1101a)。
- 8 この分野の心理学研究の総括としては、Martel, Steger 2016, George, Park, 2016, Wong 2012など。
- 9 達成も同じではないかと思われるかもしれない。しかしWBで問題になる達成の(うちの)要因、側面が、運によって大きく左右されるようなものであると考えることは、実はあまり説得力がないと思われる。これについては拙論「善のリストを検討する(その四)」(愛知大学『文学論叢』156, 2019所収予定)参照。
- 10 Landau 2017の論は、WBに置き換えるなら、少しの幸福でも満足しろと言っているに等しいことになりかねない。
- 11 この映画ではこうした身体性がいくつかの点で強調されている。敵役といったん握手を交わしたジョージの手が、敵役との結託を拒絶するように彼を強いるシーン。また、パラレルワールドは彼がいないために、敵役のパッターが牛耳っている世界だが、その描写の中にポッターは登場しない。むしろカメラの焦点は、友人たちの顔の表情がいかに大きく異なってしまうかに向けられる。人間の体現する価値がいかに周りの人々の表情に反映されていくかが描かれている。
- 12 他にEvers, Smeden 2016など。

文献 (後半で直接的に言及したもののみ。間接的引証などは除く)

- ・ Bramble B. 2015. Consequentialism about Meaning in Life. *Utilitas*, 27, 445-459.
- ・ Cahn S. 2008. Meaningless Lives ?. in Klemke,

- Cahn eds. *The Meaning of Life : Reader 3rd ed.* Oxford U.P. 236-238.
- ・ Cahn S, Vitrano C. 2014. Living. Well *Think*, 38, 13-23.
- ・ Diener E., Lucas R., Scollon C. 2006. Beyond Hedonic Treadmill. *American Psychologist*, 61, 305-314.
- ・ Evers D., van Smeden G. 2016. Meaning in Life : In Defense of the Hybrid View. *The Southern Journal of Philosophy*, 59, 355-371.
- ・ Fletcher G. 2016. Objective List Theories. in Fletcher G. Ed. *Routledge Handbook of the Philosophy of Well-Being*. Routledge. 148-160.
- ・ George, L. Park, C.. 2016. Meaning in life as comprehension, purpose, and mattering: Toward integration and new research questions. *Review of General Psychology*, 20, 205-220.
- ・ Heathwood C. 2016. Desire-fulfillment Theory. in Fletcher G. Ed. *Routledge Handbook of the Philosophy of Well-Being*. Routledge. 135-147.
- ・ Kauppinen A. 2013. Meaning and Happiness. *Philosophical Topics*, 41 (1):161-185.
- ・ Kauppinen A. 2015. Review of Metz T. Meaning in Life. *Ethics*, 125, 600-605.
- ・ Landau I. 2017. *Finding Meaning in an Imperfect World*. Oxford.
- ・ Martela F., Steger M. 2016. The Three Meanings of Meaning in Life. *The Journal of Positive Psychology*, 11, 531-545.
- ・ Metz T. 2002. Recent Work on Meaning of Life. *Ethics*, 112, 781-814.
- ・ Metz T. 2013. *Meaning in Life*. Oxford U.P.
- ・ Metz T. 2015a. Assessing Lives, Giving Supernaturalism It's Due, and Capturing Naturalism. *Journal of Philosophy of Life*, 3, 228-278.
- ・ Metz T. 2015b. Fundamental Conditions of Human Existence as the Ground of Life's Meaning. *Religious Studies*, 51, 111-123.
- ・ Metz T. 2016. Further Explorations of Supernaturalism about Meaning in Life. *European Journal for Philosophy of Religion*, 8, 59-83.
- ・ 森岡 正博. 2015. 「人生の意味」は客観的か——メッツの所論をめぐって. 『現代生命哲学研究』, 4, 82-97.
- ・ Purves D., Delon N. 2018. Meaning in the Lives of Humans and Other Animals. *Philosophical Studies*, 175, 317-338.

- Railton P. 1986. Facts and Values. in *Facts, Values and Norms*. Cambridge U.P. 2003. 43-68. (初出 *Philosophy and Public Affairs* 13, 134-171.)
- Rosati C. 2006. Personal Good. in Horgan T., Timmons M. eds. *Metaethics after Moore*. Oxford U.P. 107-132.
- Schnell T. 2010. Existential Indifference : Another Quality of Meaning in Life. *Journal of Humanistic Psychology*, 50, 351-373.
- Smuts A. 2018. *Welfare, Meaning, and Worth*. Routledge
- Svensson F. 2015. Why Subjectivism about Meaning in Life Might Not Be So Bad after All. (unpublished manuscript).
- Williams B. 1993 Postscript. in Statman D. ed. *Moral Luck*. State University of New York P. 251-258.
- Wolf S. 1997. Happiness and Meaning. *Social Philosophy and Policy*, 14, 207-225.
- Wolf S. 2010. *Meaning in Life and Why It Matters*. Princeton
- Wong P. 2012. Introduction. In Wong P. ed. *The Human Quest for Meaning 2nd. ed.* Routledge. xxix-xlvi).
- Woodard C. 2016. Hybrid Theories. in Fletcher G. Ed. *Routledge Handbook of the Philosophy of Well-Being*. Routledge. 161-174.
- Wrzensniewsky A., Dutton J. 2001. Crafting a Job : Revisioning Employees as Active Crafters of Their Work. *Academy of Management Review*, 26, 179-201.
- Wrzensniewski A., Dutton J., Debebe G. 2003. Interpersonal and Sensemaking and the Meaning of Work. *Research in Organizational Behavior*, 25, 93-135.

